研究論文

日本におけるヘッセ受容
—1930年代まで—

田　中　　洋

アブストラクト

本稿では、近現代ドイツ・スイスの詩人であり作家であるヘルマン・ヘッセ（1877-1962）の日本における受容、とりわけその最初期の様相を明らかにすべく、まずヘッセ以前のドイツ文学の翻訳と受容について確認し、次いでヘッセの作品が初めて翻訳された1909年から1930年代までの翻訳およびヘッセに関する言説を整理する。ヘッセの受容の初期段階において、その紹介役として活躍した三井光弥と高橋健二の言説を通じ、ヘッセは日本人にとって東洋の文化を再評価しこれに立ち返るための旗印とされ、そして遠い青春時代を想起させる作風をもって「懐かしまれる詩人」として定着させられたことが明らかとなる。

キーワード　ヘルマン・ヘッセ　日本　受容　翻訳　高橋健二　三井光弥　1930年代

はじめに

「東洋の理解者」、「青春文学の詩人」、「ユング派精神分析の作家」——ヘッセをめぐる言葉は様々である。ヘルマン・ヘッセ（Hermann Hesse, 1877-1962）はドイツ、シュヴァーベン地方のカルフで敬虔主義の家庭に生まれ、祖父や父と同様に牧師になるべく神学校に進むものの脱走、そして幾度もの挫折を経て、やがては近現代ドイツならびにスイス、ひいてはヨーロッパを代表する作家となった。日本でも広く読者を獲得したヘッセであるが、冒頭に挙げた鍵語によってヘッセのイメージが一人歩きしている感は否めない。ヘッセに対する偏った解釈あるいは受容の在り方への指摘は、渡辺勝『ヘルマン・ヘッセと日本人』における言及以前から存在するものの、ヘッセをめぐる様々な言説を踏まえて十全に論じ尽くされてきたかと問われれば、首肯しがたいところがある。ヘッセの最初の邦訳が現れてからすでに100年が経ち、その間に量的な変化はあれども、ここ日本においてヘッセの受容は絶えることなく一つの歴史を築いてきた。ヘッセにまつわる鍵語を紐解き、連綿と続いてきたこの受容（史）を再考すべく、本稿ではヘッセ受容の礎となったわが国におけるドイツ語ならびにドイツ文学受容の初期の形態について前史として触れた上で、翻訳を通してヘッセが紹介され始めた最初期の様相を探っていくこととする。

0. 前史——ヘッセ以前——

本節では日本における「ヘッセ以前」、すなわち最初の翻訳が発表される以前の1900年頃までを射程とし、わが国におけるドイツ語受容ならびにドイツ文学の翻訳の歴史を整理しておく。「ヘッセ以前」の発端をどの時期にまで遡るべきか、また何をもってその嚆矢とすべきかは大いに議論の余地があるものの、本稿では大学という教育機関においてドイツ語が体系的に学ばれるようになった時期をひとまずそ

の起点とする。『日独文化人物交流史』によれば、1869年に東京大学の前身である大学南校[1]が設立され、それとともに英語やフランス語に並んでドイツ語も講じられるようになった[2]。これには、普仏戦争（1870-71年）におけるプロイセンの勝利が少なからず影響しており、「ヨーロッパの一連邦に過ぎなかったプロシアが普仏戦争において勝利を収め、国家統一を成し遂げたことがわが国の為政者の注目を引くに及び、次第に新興ドイツは新生日本の近代化のモデルと仰がれるようになっていった」[3]とされている。とは言え、当初からドイツ語に学生の人気が集中していたわけではなく、同書によれば1871年1月の大学南校の学生総数310名のうち、英語専修の学生は219名、フランス語は74名、ドイツ語は大きく引き離されて17名に過ぎなかった。しかしながらドイツ語は徐々に人気を博していく。先の引用箇所に続いて「日本人はドイツの科学・文化の優秀性にも漸次気づくようになり、とくに医学界においてはドイツ医学が一大潮流となり、ドイツ語が重要な外国語となるに至った」[4]とあるが、これは明治期にドイツから多くの医学者が来日したことが関係している。すでに1690年にはケンペル（Engelbert Kämpfer, 1651-1716）が、そして1823年にはジーボルト（Franz von Siebold, 1796-1866）が来日を果たしていたが、明治期にはミュラー（Leopold Müller, 1824-1893）、スクリバ（Julius Scriba, 1848-1905）、ベルツ（Erwin von Bälz, 1849-1913）らが次々と来日した。彼らは1868年から1899年にかけてヨーロッパやアメリカから招聘されたいわゆる「お雇い外国人」たちであり、法制・金融・軍事・外交・産業・建築・教育・学問・芸術と多方面にわたり近代日本の地盤作りに大きく貢献した。さて、ドイツ文学が講じられるようになるのは1889年、すなわち1887年に東京帝国大学に独文科が設置されてからさらに二年後のことである[5]。同年、東大教授に着任したカール・フローレンツ（Karl Florenz, 1865-1939）もこうしたお雇い外国人の一人であり、以後25年にわたりドイツ語およびレッシング、ゲーテ、シラーを中心にドイツ文学を講じた。1889年はプロイセン憲法をモデルにした大日本帝国憲法が発布された年でもあり、1890年代以降ドイツ哲学の研究が盛んになっていくことを鑑みると、この時代にわが国のゲルマニスティックの基礎作りがなされたと言って良いであろう。ところで、翻訳文学の下地作りは大学外で始まった。ドイツ文学の最初の翻訳は斉藤鉄太郎による『瑞正独立自由之弓弦』（1880年）である。これは当時、自由民権運動の高まる中、政治的騒動がしばしば起こっていたことを背景にして、シラーの『ヴィルヘルム・テル』が政治劇として抄訳されたものである。また、この時期にはグリム童話の翻訳も現れていたことを付言しておきたい。1886年にカタヤマキンイチロウ訳『羊飼いの童』（KHM152）がローマ字印刷で出版され、1887年には童話選集という体裁で『西洋故事神仙叢話』が出版された[6]。この年を境にドイツを含む外国語文学の翻訳出版点数が飛躍的に増加するが、翻訳作品が新聞や雑誌において本格的に紹介され始めたことがその最大の理由であろう[7]。こうした訳業の中

ヘッセの著作に関して、本稿では底本として、Hesse, Hermann: *Sämtliche Werke in 20 Bänden*. Frankfurt am Main(Suhrkamp) 2005を用いた。以下SWと省略し，ローマ数字は巻数を、アラビア数字はページ数をあらわす。なお引用はすべて拙訳による。

1　徳川幕府の創設した開成所が開成学校へと改称され、のちに大学南校と改称された。

2　宮永孝『日独文化人物交流史　ドイツ語事始め』三修社、1993年、213頁参照。

3　同書、313頁。

4　同書、313頁。

5　日本におけるゲルマニスティックの黎明期については、相良守峯「日本における独文学研究の過程」（財団法人日独協会編『再建20周年記念　日独文化交流の史実』1974年、25-35頁所収）に詳しい。同稿ではフローレンツの弟子たちが東大卒業後に各地の大学で行なった講義や、研究・著作について詳述されているが、本稿では紙幅の都合上詳細に立ち入ることはしない。

では、森鴎外の仕事が占める割合も大きい。鴎外は1888年にドイツ留学から帰国すると、レッシング『エミリア・ガロッティ』やホフマン『スキュデリー嬢』を翻訳した。『於母影』には、ゲーテ『ヴルヘルム・マイスターの修業時代』の「ミニヨンの歌」の訳も収められ高い評価を得た。さらに、同じくゲーテの『ゲッツ・フォン・ベルリンゲン』や『ファウスト』の訳を次々と発表し、『若きヴェルテルの悩み』の翻訳は当時の若者に熱狂的に迎えられた。新しい憲法のもと新しい国づくりへの気運が高まり、そして外国からの異文化を積極的に摂取していこうとする流れを受け翻訳出版が活発化していく中で、世紀転換期を経ていよいよ日本にヘッセが現れる。

1. 最初期の受容——1930年以前——

日本におけるヘッセの受容は、茅野粛々訳『友』が1909年（明治42年）に新ロマン主義の文芸雑誌である『スバル』誌上へ掲載されたことに端を発する[8]。『友』は三部構成である『クヌルプ』(*Knulp*, 1915）の第二部を訳し、これに邦題を付したものである[9]。当時から、作品の原タイトルに人物名が付されている場合は、これをそのまま翻訳書のタイトルとはせずに、内容に即した邦題が付されることが一般的であった。ヘッセに関しては、臨川書店による翻訳全集（作品全集が2005-2007年、エッセイ全集が2009-2012年に刊行）が出版される以前はこうした流れを踏襲し続けており、これはドイツ文学ひいては海外文学に対するわが国特有の姿勢と考えられる。外国文学に邦題を付す慣習について、高橋健二はその内情を明かしている。

> 戦前、まだヘッセがあまり知られていないころ、「ゲルトルート」を訳して出版することになったが、片かなの題名では、売れ行きが悪いというジンクスがあるので、出版社から、日本名をつけてほしいと頼まれた。
>
> 古くは「ハムレット」、「ファウスト」、新しくは「ジャン・クリストフ」「ロリータ」などと、いくらも片かな名でまかり通っている作品があるが、新しく紹介するとなると、片かなの外国名では通りにくい、というのも、もっともである。
>
> そこで、いろいろ思案したあげく、「ゲルトルート」という作品の中にあることばであり、テーマでもあるので、「春の嵐」という題にした。はたして、題名のせいか、たいした反響で、よく売れた[10]。

6　KHM6、9、21、29、39-1、39-2、57、62、81、88、133の計11話が収録されている。グリムの翻訳についての解説他、明治期の翻訳に関する記述で引用元を特に明記していない箇所については、橋本孝「ドイツ文学受容の歴史——社会史の観点から」In: *Gelebte Partnerschaft. Deutschland und Japan.* Ruprecht Vondran (Hrsg.). Düsseldorf (Droste Verlag) 2014, S. 111-128.（ルプレヒト・フォンドラン編『生き生きとした友好関係　ドイツと日本』）を参照した。同書は独日協会連合会（Verband Deutsch-Japanischer Gesellschaften: VDJG）による刊行物である。

7　田中亮平「明治日本のドイツ文学」(『創価大学外国語学科紀要』創価大学文学部外国語学科、17号、2007年、83-106頁所収）90-91頁参照。

8　『スバル』(昴発行所、第1号、1909年）82-103頁に掲載された。与謝野鉄幹主宰、石川啄木編集・発行の同誌には、森林太郎（鴎外）『戯曲　プルムウラ』、石川啄木『赤痢』他、北原白秋や上田敏の詩に加え、与謝野鉄幹・晶子らの作品も掲載された。

9　ヘッセは『クヌルプ』の三部作をそれぞれ異なる雑誌に発表し、最終的に加筆して一冊にまとめた。そのため、『新展望』に掲載されたテクストがそのまま訳された『友』は、『クヌルプ』に第二部として収録されている『クヌルプへの私の思い出』(*Meine Erinnerung an Knulp*)とは異同が認められる。

10　高橋健二『善意への郷愁』華書房、1966年、175頁。同引用は所収のエッセイ「作品の題名」(165-180頁）の「春の嵐」(174-176頁）の項による。高橋は終戦後の一時期、「ざんげして」同作品のタイトルを原題そのままに『ゲルトルート』として出版させたが、売れ行きが芳しくなかったため、出版社の希望に沿ってタイトルを『春の嵐』に戻したところ、大きく売り上げが伸びたという。

ヘッセの本格的な受容の嚆矢は、1925年に新潮社より海外文学新選叢書の一冊として刊行された三井光弥訳『シッタルタ』(*Siddhartha,* 1922) として良いであろう。前年には三井自身による同作の紹介および解説が『新潮』に掲載され、「無意義なる白人文化崇拝の長き迷夢より醒めて、東洋的精神への復帰が瀕に叫ばれる今日、大聖(マハートマ)ガンディの国、詩人タゴールの国の遠き古代を、現代独逸の一詩人の作の中に見出す事は、意義有り興味有る事でなければならない」[11]として、当時の日本における『シッダールタ』の担う意義を説いている。同訳に関してはヘッセの母方の従弟であるヴィルヘルム・グンデルト (Wilhelm Gundert, 1880-1971) [12]の果たした役割が大きい。グンデルトは当初は神学者として来日し、一高でドイツ語を教え、その後東京や新潟でキリスト教の伝道活動に従事した[13]。再来日後は熊本の第五高等学校(現・熊本大学法文学部および理学部)で、そしてその後水戸高等学校でドイツ語教師を務め(1922-1927)、退職後、1927年に日獨文化協會が創立された際にはドイツ側の主事を務めており、1935年まで企画実施の任に就いていた。1935年に同所を退職した後に日本を発ち、翌1936年の春にドイツに帰国した。1936年からはハンブルグ大学で日本語学の教授を務め、総長の任に就いた。このグンデルトを介して、三井は『シッダールタ』の翻訳権を手にしたのであった。二人を引き合わせたのは、水戸高校にてグンデルトの同僚であった相良守峯である。三井は相良の同郷の先輩であり、『シッダールタ』の翻訳・出版のためにヘッセの承諾を得るべく、相良にグンデルトを紹介するよう依頼したのであった[14]。さて、当時ヘッセを紹介する記事が非常に限られていた中で、茅野蕭々が作品解説を残している点は記憶に留めておくべきであろう。茅野は「ヘルマン・ヘッセについて」のタイトルのもと、ヘッセ生誕50年を機にドイツでは『新評論』(*Neue Rundschau*) 誌においてヘッセ特集が組まれていることに触れ、『シッダールタ』に至るまでの初期作品を紹介しつつ、茅野を惹きつけたこの詩人の一貫した特質として「偉大な自然への傾倒、熱愛、執着又は沈潜」[15]を挙げている。こうして世に出さ

11 三井光弥「現代独逸の作家によつて描かれた東洋精神を主題とせる小説——ヘルマン・ヘツセの最近作『シツタルタ』——」(三井聰編『三井光彌遺稿』1955年、40-43頁所収) 41頁。初出は『新潮』24巻、2号、1924年。なお、三井のものに限らず、本稿では書名を除き引用文中の旧漢字・旧かな使いはすべて改めた。

12 ヴィルヘルムの父ダーヴィット・グンデルトの姉マリーの第二子がヘルマン・ヘッセであり、ヘッセはヴィルヘルムより3歳年長である。

13 Vgl. *Brückenbauer. Pioniere des japanisch-deutschen Kulturaustausches.*(邦題『日独交流の架け橋を築いた人々』)Japanisch-Deutsches Zentrum Berlin u. Japanisch-Deutsche Gesellschaft(Hrsg.). München(IUDICIUM Verlag)2005, S.122-126.

14 相良守峯「日本におけるヘルマン・ヘッセ」(相良守峯・尾崎喜八・手塚富雄・国松孝二監修『ヘルマン・ヘッセ全集　別巻　ヘルマン・ヘッセ研究』三笠書房、1958年、7-10頁所収) 8頁参照。しかしながら、三井自身の言によると事情は若干異なったようである。三井光弥「『シツタルタ』の作者に就いて——ヘツセの従兄よりの書翰——」(『三井光彌遺稿』、44-47頁所収) 44-45頁 (初出は『克念』3号、1925年8月) には以下の通りにある。「[…]だから私はこの書 (引用者注:『シッダールタ』) を読んだ時から、ヘッセの従兄が日本に居るという事を知って居たが、然し日本の何処でどんな事をして居る人であるのかは詮索する手がかりも無かった。偶然それを知り得たのは本年一月下旬この書の拙訳が出版されてその一部を相良守峯君 (一高教授) に贈ってからであった。[…]そんなわけで、原作者の従兄が日本に居るという事が解って、しかもその住所も知れた以上、こちらから相応の挨拶を為す義務が在ると思ったので、相良君に頼んでグンデルト氏へ訳書の一部を贈呈し、原作者へも宜しく伝達をお願いするように頼んで貰った。何事にも几帳面な独逸人の事だから、悪くすると翻訳権の侵害とか何とか面倒臭い問題も起り兼ねまじき場合なのだが、そこは、長年日本に住んで充分の理解を持っているグンデルト氏の事とて、この訳書の出版に対して非常の好意を示して、原書の出版元フィッシャー社と訳書の出版元新潮社との間が甘く行くように最善の方法を執ってくれ、色々の面倒を見てくれたのは、当事者の一人なる私としても感謝に堪えない次第であった」。なお注12で触れた通り、グンデルトは正しくはヘッセの「従弟」である。

15 茅野蕭々「ヘルマン・ヘッセについて」(北原白秋編『近代風景』アルス、2巻、7号、1927年、57-63頁所収) 58頁。

れた『シッタルタ』であったが、当時はゲルマニストおよび一般読者のいずれにおいても大きな反響を得るには至らなかった[16]。より広範な読者を獲得するには1930年代まで待たねばならなかった。

2. 1930年代

片山敏彦は1939年『文藝』誌上において「日本では、ヘッセの作品は次第に広く読まれ始めているようである。旅に出かける人も、ビューローに働く人も、学校の寄宿舎に起居する人もヘッセの作品に親しんでいるという現状を、私はたびたび聴かされる」[17]と記している。1937年に関泰祐訳の『青春彷徨（ペーター・カーメンツィント）』(*Peter Camenzind,* 1904) が、翌年には相良守峯訳『漂泊の魂（クヌルプ）』とこれに続き高橋健二訳『車輪の下』(Unterm Rad, 1905) が刊行された[18]ことで、片山の指摘したような受容の下地が作られていき、この時期からヘッセは急速に盛んに読まれるようになったと考えられる[19]。1939年に三笠書房から日本で最初のヘッセ全集[20]の刊行が開始されたのは、こうした背景と無縁ではない。

さて、時代を鑑みれば、ある文学作品およびその作家が紹介された当初は、作品分析と称したものであっても作家論的な分析や印象批評にその多くが終始することはやむを得ないことであり、ヘッセについても同様の状況であった。本節ではそうした中から特徴的なもの、後のヘッセ解釈において鍵となったものに焦点をあてることとする。

2-1. 東洋の理解者

1933年、高橋健二によって同時代のドイツ語圏の文学作品とともにヘッセの作品も紹介されている[21]。「現代文学の諸傾向　小説」の「二　社會と心理」の項においては、フロイトの影響を受けた作家としてシュニッツラーを紹介した後、精神分析の手法に則った作品として『ナルチスとゴルトムント』(*Narziß und Goldmund,* 1930) を次のように紹介している。

> […]又ヘッセのように自然の懐に生きて、魂の分析よりも専ら魂の発展に心を打ち込んで、自伝的成長小説のみを書いている人についても、最近の大作『ナルチスとゴルトムント』(Narziss und Goldmund. 1930)に於いて、精神分析学上「大いなる

16　井手賁夫は「[…]三井光弥氏が「シッダールタ」を、すでに大正一四年一月に新潮社から、「海外文学新選」の一篇として訳出して大きな反響をまきおこし、「東京日々新聞」に高須芳次郎氏がこれを推薦して、東西の文明を融合する「新文明創造の前途に光を投げかけるものは実にこの一篇であろう」と激賞していた、ということである」と書きつつも「もっとも「シッダールタ」のような作品では、有識者の注目はひいても、一般の人気を得るというわけにはいかなかったのであろう」と結んでいる。井手賁夫『ヘルマン・ヘッセ研究——第一次大戦終了まで——』(三修社、1972年) 所収の「一　ヘルマン・ヘッセとの出会い」(1-19頁) 2頁を参照。

17　片山敏彦「ヘッセの文學の背景」(『心の遍歴』中央公論社、1942年、120-133頁所収) 121頁。初出は『文藝』1939年7月号。

18　これら三作はいずれも岩波文庫から刊行された。当時、岩波書店はドイツのレクラム文庫を模した岩波文庫の刊行をスタートさせたばかりであった。

19　当時を振り返り、井手は前掲書の同頁にて次のように述べている。「その頃（引用者注：1935年頃）「我が幼年時代」を訳して、戸川秋骨先生の紹介で、ある出版社にもって行ったことがある。もちろん断られたが、その理由は、作者も訳者も名が知れていない。どちらか一方でも有名であればよいのだが、ということだった。高橋健二氏が、つぎつぎとヘッセを訳して、ヘッセが日本でひどく有名になったのはそれから二、三年後のことだった。」

20　全18巻と別巻『ヘッセ研究』からなる。

21　高橋健二「現代文学の諸傾向　小説」(『岩波講座　世界文学　第六巻　現代の文学及諸美術（一）』岩波書店、1933年、1-39頁所収) を参照。

22　同書、19-20頁。引用における「大いなる母」(Magna mater) とは、スイスの精神分析医C.G. ユングが唱えた元型理論における「太母」を指している。太母とは、民間信仰においては地母神として表現されている「生む」ことと「殺す」こと双方を司る生命の根源の象徴なるものとされている。同書においてはユングの名は特に言及されていない。

母」(Magna mater)と称せられる一切の美の原型への憧憬が主題をなしているのを見る[22]。

ここではヘッセは「精神分析学の軌道に乗った」[23]作家として紹介されながらも、高橋の力点はすでに「自然の懐に生き」そして「自伝的成長小説のみを書」くというヘッセの姿に置かれている。さらに同論において高橋はハンス・グリム『場所のない国民』(Hans Grimm. *Volks ohne Raum,* 1926) を例として挙げ、社会的現実を背景に、作品の舞台を海外やかつての植民地に設定する作品がある一方で、精神的な立場からとりわけ東洋が作品の舞台とされることも多々あるとして、ダウテンダイやケラーマンの日本小説や紀行物を挙げつつ、これらに加えて『シッダールタ』も取り上げている。やや長くなるが、『荒野の狼』への言及を挟み『東方への旅』まで解説した箇所を引用する。

> […]ヘッセの『シッダルタ』(Siddhartha. 1923)は、作者の求道心の真摯さと、スイスの片田舎に悠々自適している作者の東洋人的心境の故に、又彼の父も彼自身も印度に旅したことがあるために、東洋に対する最も深い理解を示している。[…]彼のように、西洋人らしい執着と脂こさを脱して、則天去私の態度で道を歩まんとする淡々たる風格をもつ人は珍しい。戦後ヘッセのその傾向は益々濃くなり[…]彼は「精神的虚無主義」に深入りして行くかの観がある。霊をなみする現代文化を痛撃した『荒野の狼』(Steppenwolf. 1927)は全くその態度の表白であった。併し憧憬は常に否定より美しい。『ナルチスとゴルトムント』は、迷路からヘッセ本来の面目に立ちかえったような感じを抱かせた。次いで、最近の『東洋行き』(Die Morgenlandfahrt. 1932)は再び霊の国東洋への憧憬を神秘的な物語に寄せて叙している[24]。

精神的虚無主義を経て人間愛と東洋への憧憬に立ち戻るとして、ここではヘッセの東洋人的心情、東洋への深い理解と憧憬について書かれているが、ヘッセのアジア旅行の記録を鑑みれば、こうした解釈には首肯しかねる。ヘッセはマレーシア、スマトラ、スリランカと旅をし、欧米人に搾取される人々とその不衛生な暮らしぶりを目の当たりにして、アジアに対して抱いていた「東方の理想郷」というイメージを完全に破壊されたのであった。しかしながらまたヘッセは『インドの思い出』(*Erinnerung an Indien,* 1917) において、この旅を評して「民族の垣根を越え、一つの人類があるという、ささやかな大昔から自明である真実が、かの旅の究極にして最大の体験であった」[25]と振り返っており、最早「東洋」に対して幻想は抱いていないことが分かる。また『アジアの思い出』(*Erinnerung an Asien,* 1914) といったエッセイからも、ヘッセ自身が旅行から数年を経て、旅の成果を冷静に分析できるようになったことが窺われる[26]。そして『東洋行き』というタイトルにも言及しておかねばならない。現在、同作は一般的に『東方への旅』のタイトルで呼ばれている。Morgenlandとはいち早く夜が明けて朝が来る地、すなわち日出る東方を指しているが、これを「東洋」と訳したことで原語が本来備えていた観念的なニュアンスが損なわれてしまっている。高橋自身が指摘している通り、『東方への旅』は「時空を超えた旅」[27]であり、観念的な旅の記録である。こうした作品紹介と解説がヘッセの意図と作品を乖離させ、詩人の

23 高橋、前掲書、20頁。
24 同書、24-25頁。
25 Vgl. SW. XIII, 378-383, hier S. 382.
26 Vgl. SW. XIII, 351-354.
27 高橋、前掲書、25頁。

一側面を限定的に強調した「西洋における東洋の理解者」というヘッセ像の創出に少なからず関与したことは否めない。

同様の論調は、前節で紹介した三井光弥による記述においても確認できる。三井は『獨逸文學に於ける佛陀及び佛教』のはしがきにおいて、『シッダールタ』翻訳を機縁として他のドイツ文学作品においても東洋の思想を取り入れたものがないか興味を抱くようになったこと、また仏教徒である日本人が「佛教の再認識」に際して、ヨーロッパの作家たちが仏教をどのように描いたかという視点から見つめ直すことの有用性を述べ、そもそも仏教国日本において質の良い仏教文学が存在するのだろうかと問うている[28]。同書においては『シッダールタ』の作品解説が掲載されているが、注目すべきはヘッセとインド、および『シッダールタ』執筆の契機となった出来事を解説している箇所である。

> 然らば、ヘッセの印度旅行の収穫は、あの痛ましい幻滅感と一巻の『印度紀行』(一九一三年)のみであろうか？否、ヘッセはあの痛ましい幻滅感から、「我々自身の裡に新たに建設せんとする楽園」の一つの試みとして、この『シッダールタ』を書いた[…]。即ちこの種の作品の最高峰をなすこの「印度の詩」は、彼自らを仏陀時代の東洋の楽園に置いて、(輪廻(サンサーラ)説的に云えば、彼の前生の存在をそこに求めて)一人の求道の子の迷いや悟りのうちに彼自身のそれを幻想し、以て彼の体得せる印度的精神の一切を告白し、その心髄を芸術的に表現したものに他ならない[29]。

「我々自身の裡に新たに建設せんとする楽園」とは、引用中で『印度紀行』と訳されているヘッセの紀行文*Aus Indien*において確認できる表現である。同エッセイにおいて、確かにヘッセは次のように記している。

> […]私たちはとっくの昔に楽園を失っていて、私たちが欲しいと求め、築きあげようとする新たな楽園は、赤道や東方のあたたかな海に見出すことはできない。楽園は私たちの中に、私たちが住む北方の国々の未来それ自身の内にあるのだ[30]。(傍線は引用者による)

引用からはヘッセの落胆ぶりが窺われるものの、ヘッセの眼差しは現実の未来へ向けられていることが分かる。すでに高橋健二の引用においても述べた通り、ヘッセは幻滅の果てに内なる世界へ逃避したわけではなく、この経験から、あらゆる人間存在は一つであり、近しく繋がっているのであると強く確信するに至ったのであって[31]、アジア旅行の経験とかの地における信仰・思想に対する敬意を込めて、あくまでも創作の一つの形として『シッダールタ』は書き上げられたのである。ヘッセに対する三井と高橋の根本的な姿勢は、秋山六郎兵衛の「私たちは現代ヘッセを精読することによって西欧文化を再検討し、私たちの魂の故郷である東洋文化を新しく価値づける時期に当面しているのである」[32]という一言に集約されていると言えよう。

---

28 三井光弥『獨逸文學に於ける佛陀及び佛教』第一書房、1935年、1-6頁(「はじめに」)参照。

29 同書、417頁。

30 Vgl. SW. XIII, S.278.

31 Vgl. SW. XIII, S.283.
『インドの思い出』の最終部であるこの「帰途」(*Rückreise*)と題されたパートにおいて、先の引用と同様の内容が繰り返されている。

32 秋山六郎兵衛「ヘルマン・ヘッセの人と作品」(『讀書と人生』三笠書房、2巻、8号、1939年、6-8頁所収)8頁。同号では同年に刊行が開始された三笠版全集(1939-41年)を受けてヘッセ特集が組まれており、訳者である秋山六郎兵衛、片山敏彦、相良守峯、舟木重信、手塚富雄、石中象治らが寄稿している。また全集の訳者ではないが成瀬無極や、意外なところでは関口存男の寄稿も掲載されている。

2-2. 世界市民的精神の作家

こうしたヘッセと東洋を緊密に結びつける解釈の潮流と離れて、片山敏彦は独自のヘッセ論を展開していた。片山は「若きヘルマン・ヘッセの二元」[33]（1934年）において『ヘルマン・ラウシャー』の作家論的分析を展開していたが、本節冒頭でも引用した「ヘッセの文學の背景」（1939年）においては、詩人としてのヘッセに対置させ、作家としてのヘッセの思考方法を論じている。その際、先輩格であるドイツの作家たちが比較対象として挙げられるだけでなく、イマージュを鍵語として据え比較文学の見地から論を展開している点は、作家論的分析が多くを占めていた当時のゲルマニスティックにおいて、かなり先進的であったと言えよう。Thomas Beckermannと宮下啓三は、ゲルマニストの多くがヘッセのセンチメンタルさを称賛する一方で、片山がヘッセを世界市民的詩人と捉え、純粋なる魂の真剣さを、そして世界市民的精神が根ざしていることをヘッセに認めた点を評価するものの、こうした解釈は日本のゲルマニスティックにおいては定着しなかったと断じている[34]。

2-3. 懐かしまれる詩人

最後に高橋健二の言説をもう一つ引用したい。本節冒頭における片山の引用によれば、1939年の時点でヘッセが読まれ始めた感があるということであった。高橋も同様の内容を「ヘッセの讀者について」（1939年）と題されたエッセイにおいて述べている。高橋は「ヘルマン・ヘッセがこの頃、急に読まれだしたのは、むしろ遅すぎると言えよう」[35]と切り出し、当時の日本の読書界におけるヘッセ受容を以下の通りに評している。

> 遅れて読まれだした理由の一つは、彼が飽くまで内面的な作家だという点にあるだろう。彼もノーベル賞の候補者の噂に上ったことはあるが、彼の作風はそういうセンセイションを起こすていのものではない。[…]確かに彼は「内面的な、余りに内面的な」詩人である。従って何らかのきっかけに大きなセンセイションを起こして、洪水の如く売れるというような本を書いてはいない。それが今まで彼を日本に移す機会を逸して来た理由と言えよう[36]。

そして高橋は、こうした理由ゆえにヘッセは常に親密な読者を獲得するのであるとし、自身の内面へと独り沈潜していく姿勢や作風が、1930年代末という動乱の時代において日本の人々を強く惹き付けたのだとしている。同エッセイの末尾において、高橋は「孤独と漂泊のうちに心の故里を求めるヘッセは、理解される作

33 片山敏彦『心の遍歴』中央公論社、1942年、61-95頁所収。初出は日独文化協会・東京帝国大学独逸文学会編『独逸文学研究』5号、1934年。

34 Vgl. Beckermann, Thomas u. Miyashita, Keizo: Irgendetwas Unnennbares, wahrscheinlich Morgenländisches. Anmerkungen zur Hermann-Hesse-Rezeption in Japan. In: *Text+Kritik.* Heinz Ludwig Arnold (Hrsg.). München (edition text + kritik GmbH) 1977, Heft 10/11, S. 101-109, hier S. 103f.

35 高橋健二「ヘッセの讀者について」（『現代ドイツ文學と背景』河出書房、1940年、212-215頁所収）212頁。同エッセイは「第三部　ヘッセとカロッサ」に収録されている。初出は文理科大学新聞会編『文理科大学新聞』1939年7月号。文理科大学は東京教育大学（現在の筑波大学）の前身である。

36 同書、213頁。同引用において「彼もノーベル賞の候補者の噂に上ったことはある」と記述にある通り、ヘッセは1946年にノーベル文学賞を受賞するまで、数回に渡って複数の作家から推薦を受けている。1931年にはトーマス・マンより、1933年と1944年にはアンデルス・エステルリング（Anders Österling）より、1938年、1939年そして1942年にはシーグフリート・シーヴェルツ（Sigfrid Siwertz）によってノミネートされた。最終的に1946年にエステルリングおよびローベルト・フェージ（Robert Fäsi）による推薦を受け受賞に至った。ノーベル賞のオフィシャルサイトに詳しい。以下のページを参照されたい。
http://www.nobelprize.org/nomination/archive/show_people.php?id=4133（2016年9月14日アクセス）

37 高橋、前掲書、215頁。

家でなく、懐かしまれる詩人である（圏点は引用者による）」[37]とヘッセを位置づけている。確かに、ヘッセは小説作品に関して言えば、構成の際立ったプロット作りの名手というわけでもなければ、社会性を前面に打ち出したいわゆる現実的・写実的な作品の書き手というわけでもない。その本質は詩のようなイメージの数々によって物語を紡ぐことの妙にあり、小説作品であってもそれらは限りなく詩の延長線上において存在しており、ヘッセはあくまでも自身の「詩人」としての態度を崩さないのである。その意味の限りで、ヘッセは確かに「理解される作家」とは異なるのであろう。高橋は詩人としてのヘッセの特質と作風を踏まえた上で、遠い青春時代を映し出し読み手に「懐かしまれる」存在としてヘッセを捉えたのである。しかしながらこうした解釈のもとで、世論に物申す世界市民としてのヘッセの姿は背景に押しやられ、青春の作家というイメージのみが輝きをいや増していった事実は否定しがたい。それが確固たる形で定着したことは、当時の朝日新聞に掲載された三笠版全集の広告における「青春の文学.若人への贈物」[38]という売り文句に見て取れる。

おわりに

本稿ではわが国におけるヘッセ以前のドイツ文化・文学の受容の様相をまず紹介し、次いで高橋健二と三井光弥の言説を中心に1930年代までの翻訳や受容の諸相を確認してきた。「自然へと沈潜する作家」として紹介されたヘッセは、1930年代末という時代を背景に、西洋における東洋の理解者と解されることで、ヨーロッパ人でありながら「無意義なる白人文化崇拝の長き迷夢より醒め」させるための旗印として受け入れられた。そして、遠い青春時代を想起させる作風から「懐かしまれる詩人」としてその位置づけがなされ、わが国における受容が始まったのである。

参考文献

ユング，C.G.（林道義訳）『元型論＜増補改訂版＞』紀伊國屋書店、1999年。

三井光弥『獨逸文學に於ける佛陀及び佛教』第一書房、1935年。

三井聰編『三井光彌遺稿』1955年。

宮永孝『日独文化人物交流史　ドイツ語事始め』三修社、1993年。

相良守峯・尾崎喜八・手塚富雄・国松孝二監修『ヘルマン・ヘッセ全集　別巻　ヘルマン・ヘッセ研究』三笠書房、1958年。

高橋健二『現代ドイツ文學と背景』河出書房、1940年。

高橋健二他『ヘッセへの道――高橋健二古稀記念論文集』新潮社、1973年。

渡辺勝『ヘルマン・ヘッセと日本人』角川書店、1998年。

渡辺勝・田中裕編「日本におけるヘルマン・ヘッセ研究文献（1924-1977）」『ドイツ文学』日本独文学会、60号、1978年。

財団法人日独協会編『再建20周年記念　日独文化交流の史実』1974年。

38 『朝日新聞』1939年9月15日、朝刊、1頁参照。